

B215  
42



中公新書 2047

横浜市立大学学術情報センター

006266859

受入

松方冬子著

# オランダ風説書

「鎖国」日本に語られた「世界」

中央公論新社刊

## オランダ風説書

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほぼ唯一の情報源だった。幕府はキリスト教禁令徹底のため、後には迫り来る「西洋近代」に立ち向かうために情報を求め、オランダ人は貿易上の競争相手を蹴落すためにそれに応えた。激動の世界の中で、双方の思惑が交錯し、商館長と通詞が苦闘する。長崎出島を舞台に、「鎖国」の二〇〇年間、毎年続けられた世界情報の提供の実態に迫る。

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほほ唯一の情報源だった。

## はしがき

一九世紀の初めにオランダの日本商館長を務めたヘルマン・メイランは、著書『ヨーロッパ人の日本貿易史概観』の中で、世界の情報が長崎で日本人に知らされる様子を記している。

オランダ船の船長やその他の乗客が上陸してから二、三時間後、ヨーロッパ及び東インドの情報を聞くために、出島の乙名、出島町人、目付らにもなわかれて通詞仲間が商館長のもとへやってくる。この時、戦争や講和、戦闘や勝利、王の即位や死など一般的な情報が提供され、通詞らがそれを書き留める。その情報は日本文字で美しく書かれ、商館長による署名がなされた後、臨時の飛脚を立てて江戸に送られる。

このような情報の提供は日本人には最重要案件と見なされている。日本人の言うことを信じるならば、主にこの理由によって、オランダ人は日本に受け入れてもよい友人だと見なされているのである。

ここでいう「日本文字で美しく書かれ、商館長による署名がなされ」た文書が、オランダ風説書である。風説書は、オランダ人が眼にした数少ない正式な日本文書であった。江戸では老中、ことによると將軍さえ見るかもしれない。そのためとくに緊張感をもって、ていねいに仕立てられた。その書面が日本社会で特別な意味をもっていることをメイランは感じ取ったのだろう。「美しく」という言葉に、その新鮮な感動が読み取れる。

地球と同じ大きさの「世界」で起きた出来事が語られていることが、オランダ風説書の特徴である。一七世紀から二〇〇年にわたって、情報の提供が続いたということは驚くに値する。

「風説」とは噂うわさという意味である。幕府はオランダ人に、たとえ噂にすぎないことでも伝えるように望んだ。かたやオランダ人が、噂にすぎませんと言い訳することもあった。風説書を幕府に提供したのは、オランダ人だけではなかった。中国や東南アジアから来航する唐船とうせんも情報をもたらした。ただ、唐船はほとんどの場合、その船が出港あるいは寄港してきた場所についての局地的な情報をもたらしただけである。それらの情報は唐船風説書または唐風説書と呼ばれるが、以下単に風説書という場合はオランダ風説書を指す。

異なる言語が出会うところに風説書は生まれた。一七世紀、オランダ語と日本語はポルトガル語によって仲介されていた。一八世紀に入ると、二つの言葉は直じかにぶつかり合うようになる。言語と言語のぶつかり合いは、文化と文化の、世界観と世界観のぶつかり合いでもある。言語の面でも、文化の面でも、世界観の面でも、オランダの「文法」で語られ、あるいは書かれている情報を、いかに日本の「文法」に直して伝えるか。内容を語ったオランダ商館長も、そして日本語に訳した長崎の通詞も、つねに模索しなくてはならなかった。オランダ人がそれを判断するためには、日本社会についての知識が不可欠だったが、出島で得られる知識は不十分だった。一方、通詞たちも、限られた接触からではオランダ人側の事情について学べることには限界があった。また、長崎町人であるという身分上の制約から、江戸の幕府中枢の考えていることはわからなかった。そして、互いに伝えられないほうが良いと判断したり、意図的に内容を変えたことも多かった。伝えようとしても、結局のところ伝わらないことさえあった。情報の伝達は操作や遮断の危険をつねに孕はらんでいたのである。

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほぼ唯一の情報源だった。

オランダ風説書◆目次

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほぼ唯一の情報源だった。

はしがき i

### 第一章 「通常の」風説書

長崎と「四つの口」 「鎖国」政策の「仮想敵」  
種類・頻度・内容 分厚い研究史 「原文」が存在したという通説 通詞が残した記録 風説書の下書き もう一つの下書き 「原文」は存在しなかった

3

### 第二章 貿易許可条件としての風説書

「四つの口」の整備 オランダの動き 情報提供の義務づけ 幕府の論理 オランダ風説書の「成立」 ポルトガル使節来航情報 通詞の影響力の大きさ ポルトガルとイギリス共謀の噂 ポルトガル使節のバタフィア寄港 オランダとポルトガルの休戦 幕府の譴責

33

### 第三章 風説書の慣例化

東アジア動乱の最終局面 消えてしまう情報 和文書書の作成命令 「ヨーロッパと東インド」の情報 フランス東インド会社設立とカロン 風説書をオランダ語に訳す フランス使節来航情報 リターン号事件 オランダ側の事情 情報集散地としてのオランダ共和国 もう一つの情報集散地、バタフィア オランダ東インド会社の情報配信網 会社にとっての情報意義

61

### 第四章 脅威はカトリックから「西洋近代」へ

安定の東アジア 動乱のヨーロッパ 「鎖国祖法観」の誕生 シyam風説の時代 シyam王室ジャンク船貿易 オランダ東インド会社とシyam 幕府はヨーロッパに興味なし シyam情勢と絡めて伝えよ 消えつつあるカトリック勢力への恐れ プラシシーの戦い 彼らは何でも信じる 半端に伝

93

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほぼ唯一の情報源だった。

## 第五章 別段風説書

えられたセイロン情勢　オランダ風説書の黄金時代  
貿易交渉の切り札としての風説書　日本からの撤退  
を検討　東インド会社の消滅　操作されたフラン  
ス大革命の情報　レザノフ来航予告情報　フェ  
ートン号がもたらした情報の波紋　嘘をつき通す商  
館長　新たな脅威としての「西洋近代」

141

## 第六章 風説書の終焉

アヘン戦争の勃発　「通常の」風説書の蘭文控  
総督の決定　アヘン戦争情報としての初期別段風説  
書　難航する翻訳　蘭文と和文の比較　通詞に  
よる翻訳の特徴　東アジアの英語新聞　アヘン戦  
争から世界の情報へ

163

日本の開港　ペリー来航予告情報　その他の日本  
関連情報　バタフィアから送られた最後の別段風説  
書　「通常の」風説書の終焉　別段風説書の送付  
中止　一八五九年、最後の風説書　オランダ風説  
書の第三類型

## おわりに

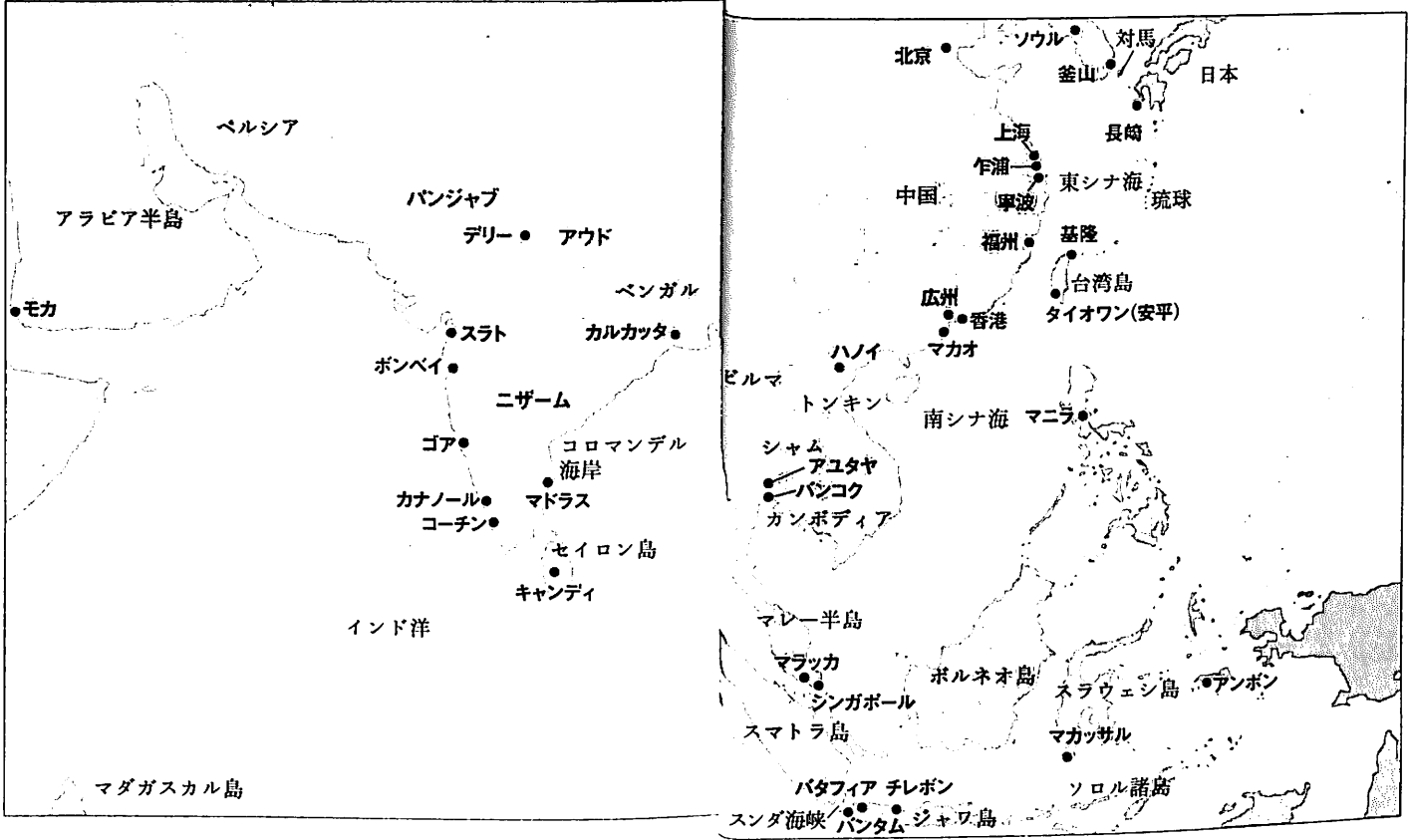
風説書から見えるもの　風説書の背景　通詞の情  
報操作と訳語の限界　西洋からのささやき

191

あとがき 204

主な参考文献・史料一覧 206

日本人の海外渡航を禁じた江戸幕府にとって、オランダ風説書は最新の世界情勢を知るほほ唯一の情報源だった。



オランダ風説書◎関連地図